

修士論文概要書

新人日本語教師の成長には何が必要か
—日本語学校に勤務する新人教師たちのライフストーリーから—

栄畑南美

早稲田大学大学院日本語教育研究科

本「修士論文概要書」は、修士論文「新人日本語教師の成長には何が必要か―日本語学校に勤務する新人教師たちのライフストーリーから―」をまとめたものである。以下に第 1 章から第 6 章まで、修士論文の概要を順に記述する。

第 1 章 序論

第 1 章では、本研究を行うに至った問題意識、研究の範囲と問い、研究目的と意義、論文の構成を記述した。

筆者は、大学院と A 日本語学校¹の間に乖離があると捉え、理念と実践の乖離に苦しんだ実践共同体²への参加過程を、新人日本語教師³はどのように経験するのか、新人日本語教師としてどのように成長したらいいのかと問題意識を持った。したがって、新人日本語教師が経験をどのように捉えているのかを聞き取って現状を調査し、現状を明らかにすることで、新人日本語教師の成長を実践共同体の成員が支援するために、そして新人日本語教師自身が自らの成長のために、何が必要なのかを明らかにし、提言する。本研究の問いは、「新人日本語教師の成長には、何が必要なのか」である。研究の問いを解明するために、2 つのリサーチクエスション（以下、RQ と略称）を次のように設定した。

RQ1、調査協力者である 3 人の新人日本語教師は、日本語を学ぶこと・教えることをどのように捉えているのか。

RQ2、調査協力者である 3 人の新人日本語教師は、実践現場である A 日本語学校をどのように捉えているのか。

研究の問いである「新人日本語教師の成長には、何が必要なのか」を明らかにし、提言することを 1 つ目の研究の目的とする。2 つ目の目的は、新人日本語教師が実践共同体における経験をどのように捉えているのかを聞き取って現状を調査し、実践共同体における新人日本語教師の成長過程を示すことである。

¹ 財団法人日本語教育振興協会が認定する日本語教育機関。筆者の勤務校でもある。

² 実践共同体とは、「参加者が自分たちが何をしているのか、またそれが自分たちの生活と共同体にとってどういう意味があるかについての共通理解がある活動システム」である（レイヴ&ウェンガー1993,p.80）。本研究では、A 日本語学校を実践共同体とした。

³ 教師の発達段階は、教職就任 1 年目の初任、3 年もしくは 5 年目までの新任、10 年もしくは 15 年までの中堅、それ以上の教授経験を持つベテラン・熟練といった分け方をされるのが一般的である（たとえば、秋田 1997: pp.118-119 など）。本研究では初任・新任期の日本語教師を合わせて、新人日本語教師と呼ぶ。

第2章 先行研究と本研究の位置づけ

第2章では、先人たちの主張を踏まえ本論文の理論的枠組みを示すとともに、本研究に関連する先行研究を吟味し、本研究が学術的にどのように位置づけられるかを明示した。

先行研究では、本研究に理論的視座を与える学習理論、教師の学習・成長、新人教師研究を取り上げた。新人教師研究は、学校教育における新人教師の成長、日本語教育における新人教師に関する先行研究を吟味した。本研究は、構築主義パラダイムとレイヴ&ウェンガー（1993）が提唱した正統的周辺参加論などの学習理論に立つ。したがって、新人日本語教師の学習や振り返りによる成長を、教授技術や方法の向上だけではなく、社会的、批判的な振り返りの視点を持ち、アイデンティティの変容や教育観の明確化なども含めて目指すものだと考える。日本語教育では、新人日本語教師をテーマにした研究が少ない。梅田（1999・2000）は、新人日本語教師の成長を教授能力の向上と行動ネットワークの拡大という観点から論じる研究であり、新人日本語教師の成長を解明するのには十分であるとは言えない。したがって、本研究では、日本語教育においてこれまで注目されてこなかった新人教師の成長をテーマとするところ、新人日本語教師の成長を技術的成長のみならずアイデンティティの変容と見なし、社会的、批判的な内省を通じた教育観の明確化を含んで捉えるところにオリジナリティがある。また、実践共同体への参加過程における新人日本語教師たちの「声」を聞こうとする点は、新しい試みになると考えられた。

第3章 研究方法と調査概要

第3章では、研究方法と調査概要を説明している。

まず、本研究の調査では、質的研究法の1つであるライフストーリー・インタビューを採用したことを述べた。質的研究法とライフストーリー・インタビューの定義や、選択理由を記述した。ライフストーリーとは、「個人が歩んできた自分の人生についての個人の語るストーリー」であり、語り手が「その人生で意味があると思っていることを選択的に語る」ものである（桜井 2002、p.60）。調査協力者がA日本語学校における経験をどのように捉えているのかを明らかにするには、ライフストーリー・インタビューが適切であると判断し、研究方法とした。

次に、調査概要では、調査協力者の語りやその解釈に影響を与える可能性がある要素を読者に示すために、語りが生まれた文脈や環境について記述した。すなわち、中田教師、鈴木教師、小林教師という3人の調査協力者の選定理由、調査協力者と実践の現場であるA

日本語学校に関する基本情報、筆者に関する情報、調査の流れなどを記した。また、収集したデータの分析には、佐藤（2008）の定性的コーディングを援用することを述べた。

第4章 結果と考察

第4章では、RQ1、2の答えを導くため、3人の調査協力者がこれまでにやってきた実践に関するストーリーを分析し、考察した。本概要書では、【】で焦点的コードを示しながら、簡単に記述する。

中田教師は、A日本語学校での実践を、【受験対策・言語知識】としての日本語教育を行うことだと考えている。また、【学生の管理】も、A日本語学校の教師の仕事として捉えて行っている。学生の家庭環境や日本語を学ぶ理由など、【学生の理解】をすることで、A日本語学校における実践の意味づけが可能になり、A日本語学校の教師としてこれまで実践し続けることができた。しかし、授業や進路指導などに関して、【A日本語学校への違和感】があり、【中田教師が目指す日本語教育】は、A日本語学校では実現できないと考えている。この目指す日本語教育は、【大学院での経験】に基づいている。中田教師にとっては、【通過点としてのA日本語学校】である。また、調査協力をするに当たって、【このインタビューを受ける意義】を感じていた。

鈴木教師は、A日本語学校の授業を【受験対策・言語知識】としての日本語を教えるものだと捉えている。鈴木教師は、自分が行う実践を、【実践現場に合わせる】ことが良いと考える。現在の鈴木教師にとって【目標としてのA日本語学校】であり、だからこそ、A日本語学校の実践に合わせようとする意識が高くなっている。鈴木教師が考える【日本語学習・日本語教育の範疇外】のものは、A日本語学校で実施される日本語教育とは関係のないものであり、一致する。このように、鈴木教師は、A日本語学校の価値観を深く取り入れている。しかし、【大学院に進学した理由】として、仲間作りや授業の迷いなどを挙げており、現在の状況に完全に満足しているわけではない。

小林教師も、A日本語学校の実践を【受験対策・言語知識】としての日本語教育だと捉えている。【受験対策・言語知識】を教える授業を達成するために、小林教師は様々な【学生を授業に参加させる工夫】をしている。小林教師は、他の教師から授業のフィードバックを受けながら、自分が日本語教師としての専門的力量を身につける【通過点としてのA日本語学校】だと捉えている。

第5章 総合考察

第5章では、第4章における3人の新人日本語教師のストーリーの分析と考察から、総合的な考察を行い、RQ1「調査協力者である3人の新人日本語教師は、日本語を学ぶこと・教えることをどのように捉えているのか」と、RQ2「調査協力者である3人の新人日本語教師は、実践現場であるA日本語学校をどのように捉えているのか」を明らかにした。そして、研究の問いである「新人日本語教師の成長には、何が必要なのか」の答えを導いた。

総合考察の結果、次の2点が明らかになった。まず、RQ1に関して、3人の新人日本語教師は、A日本語学校で学生が日本語を学ぶことを【受験対策・言語知識】として日本語を学ぶこと、日本語を教えることを、【受験対策・言語知識】として日本語を教えることだと捉えている。実践現場の目的とは異なった、自分にとっての日本語を学ぶこと・日本語を教えることを語った教師は中田教師1人だった。鈴木教師・小林教師の2人は、実践現場の日本語を教える目的に合わせて、日本語を学ぶこと・教えることを捉えていた。

次に、RQ2に関して、3人の新人教師は、それぞれ実践現場であるA日本語学校を【通過点としてのA日本語学校】、【目標としてのA日本語学校】と捉えている。また、A日本語学校は教師同士が相談し合える場とは捉えられておらず、新人日本語教師にとって所与の存在として捉えられている。

以上のRQの答えを踏まえ、研究の問い、すなわち「新人日本語教師の成長には、何が必要なのか」を考察した。その答えとして、次の3点を述べた。

新人日本語教師の成長に必要なものの1点目は、日本語教育観への視座である。A日本語学校の新人日本語教師は、技術や方法を身につけ、実践共同体で求められる授業ができるようになることを成長だと捉えていた。しかしながら、先行研究章で踏まえたとおり、日本語教師としての有能性や職能の向上、授業の力量形成といった狭義の成長だけでは不十分であり、新人日本語教師の成長を、社会的、批判的、人間的な面を含め、広義に捉える必要がある。したがって、新人日本語教師は、日本語教育界全体に参加していくという考えのもとで、自らがどのように日本語の学習・教育を捉え、どのような実践を目指すのかを実践共同体との相互作用の中で常に考え続けていくことが重要となる。つまり、日本語教育観への視座を持つことが必要なのである。一方で、不安定な立場から、日本語教育観への視座を持ちにくい状況に新人日本語教師が置かれていることは、今後社会的に議論される余地がある問題である。

新人日本語教師の成長に必要なものの2点目は、新人日本語教師と他の成員の双方によ

る第 3 の道の模索である。新人日本語教師は、実践共同体を所与の存在、通過点、目指すものとして捉えていた。このような捉え方では、新人日本語教師たちは一方的に参加する側であり、実践共同体側の理念や実践は変化しない。しかし、実践共同体における新参者である新人教師の疑問は、古参者である他の教師に共有されている理念や実践への問い直しを引き起こす契機となりうる。新人日本語教師という存在によって、実践共同体の変容、再構築が引き起こされる。「新参者—古参者」という二項対立を越えた、「めざすものに向けての合意形成のプロセス」が発生するのである。したがって、新人教師を含めた共同体の成員が自分の理念や日本語教育観を明らかにし、他の教師などに関わってお互いの実践や理念をすり合わせながら、第 3 の道を模索することが必要になる。そのためには、実践共同体にも「実践共同体の再生産」過程を受容し、歓迎するような風土作りが求められる。第 3 の道の模索は、実践共同体の内部においても日本語教育の多様性を可視化し、個々の教師が共同体の規範を共有しながらも、多様な日本語教育実践を展開していくことにつながるであろう。

最後に、新人日本語教師の成長に必要なものの 3 点目として、他者との振り返りが挙げられる。「成長する教師」には、実践を言語を使用して振り返り、内省することが必要である。実践共同体を越えた日本語教育観への視座を持つことを目指すのであれば、より客観的な立ち位置から自分自身を見つめ直すことが必要になる。その際、有効になるのは、新しい気づきを与えてくれる他者の存在なのである。他者と語ることによって、自分の日本語教育観や実践に新たな気づきが生まれる。新人教師には「状況を見て気づく力」の不足が指摘されており、一層他者との振り返りは有効であると考えられる。実践共同体の古参者はこのような機会を研修の一環として作り、協働的な風土作りに努めるべきである。本研究の調査協力者たちは、A 日本語学校を、悩みや考えを相談し合い、解決する場とは捉えていなかった。しかし、実際は他者とのつながりを求めている。また、他者に語るという行為自体が、新たな気づきや意味づけを生むのである。したがって、他者とともに振り返ることが、新人日本語教師の成長のためには必要になる。

第 6 章 結論

第 6 章では、本研究のまとめ、本研究の貢献、今後の課題を記述した。

本研究のまとめでは、RQ への答えと、本研究の問い「新人日本語教師の成長には、何が必要なのか」の答えとして、「日本語教育観への視座」、「第 3 の道の模索」、「他者との振り返り

返り」の3点を導いたことを述べた。さらに、この3点の実施が、新人日本語教師の成長過程だとも言えることを主張した。つまり、日本語教育観の形成・再形成と、実践共同体における実践の歩み寄り、他者との積極的な接触を試みる過程こそが、新人日本語教師が成長する過程なのである。そして、新たな成長する新人日本語教師像として提案した。

本研究の貢献は、3つの側面から述べた。まず、社会的な貢献は、新人日本語教師やこれから日本語教師を目指す人へ、教員養成機関や実践共同体へ、1つの新人日本語教師の成長のあり方と成長に必要なものを提示できたことである。次に、学術的な貢献は、これまで注目されてこなかった存在であった新人日本語教師の成長に関する新たな知見を提供し、更なる研究の必要性を示したことである。最後に、本研究の問題意識は筆者の経験から発生したため、筆者個人にとっての貢献を述べた。筆者個人にとっての貢献は、本研究を行う過程自体が筆者の成長の過程であったことと、本研究が今後の筆者自身が日本語教師として実践をしていく指針となることであった。

課題と展望は、以下の4点を挙げた。調査協力者の意味世界をより理解するために授業観察や長期的な研究が必要である点、本研究の調査協力者たちが全員大学院を経験している点、どのような他者とどのように振り返ることが最も新人日本語教師の成長にとって有効なのかという点、新たな成長する新人日本語教師に必要なものを3つ提案しただけに留まっている点である。

引用文献

- 秋田喜代美（1997）「教師の発達課題と新任教師のとまどい」『児童心理』51（5）、118-125.
- 梅田康子（1999）「新人教師のネットワークとその変化」『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究—事例研究—』日本語教育学会、pp.23-33.
- 梅田康子（2000）「新人教師の成長をめぐるいくつかの提言」『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究—最終報告—』日本語教育学会、pp.65-73.
- 桜井厚（2002）『インタビューの社会学—ライフ・ストーリーの聞き方—』せりか書房.
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社.
- レイヴ, ジーン&ウェンガー, エティエンヌ (Lave, J&Wenger, E) (1993)『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』（佐伯胖訳）産業図書（原著は1991）.